

漱石『明暗』夫婦

Junko Higasa 2016.4.2

半年程前に結婚した津田由雄は「来年 31 歳」妻のお延は「今年 23 歳」お延の従妹の継子は「来年 21 歳」この年齢ボーダーラインの表し方は見事である。

男の 30 歳は、人生計画上「多少貯金ができて結婚する」という独立適齢期である。津田は何となく結婚だけは果たしたものの、立身「31 歳」を目前に親の金銭援助を当然のように考え、仕事はうだつが上がらず、昔の恋人を思い続けている。一方、妻のお延は、売れ残りリミット「23 歳」で何とか嫁いだ。継子は、好条件を射止められるうちに婚活開始。津田の妹のお秀は、22 歳で 4 歳の子供がいる。

美人のお秀は望まれて金持ちに嫁いだ。平均以上の継子には有力者から見合い話が持ち込まれた。財産もなく器量も劣るお延は、それをカバーする知恵で夫を捕まえなければならなかった。津田は思う。

「俺はどうして、もらう気のなかった女と結婚したのだろう」元恋人の清子は、煮え切らない津田に見切りをつけて他へ嫁いでしまった。その無防備時期の津田にお延は出会い、女が眉で示す「媚」と黒目の働きと知略で射止めたのである。「金銭と容貌」で女を惹きつけてきた津田は、女の愛が真実かどうか検証せずにはいられない。「金銭と容貌」で愛される自信のないお延は、愛の確証を求めずにはいられない。外装で愛を繕う女と、外套に本心を隠す男。絶対愛と偽善愛は、表裏一体の「明」と「暗」である。